

主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	柳町 聡
主 論 文 題 目：				
在日韓国人企業家・重光武雄の理念と行動 ―ロッテの創業・成長期を中心に―				
(内容の要旨)				
本研究はロッテ創業者・重光武雄（辛格浩）の理念と行動について考察した。戦後日本で事業成功した在日韓国人企業家の多くは、日韓国交正常化を前後して母国に進出した。愛国的な思いを伴った「錦衣還郷」として儒教的正義を実現する機会でもあった。 これは在日韓国人企業家に共通したが、日韓双方の事業規模や影響力において、重光ほど両国で成功した企業家はいない。日本ではチューインガムを皮切りに業界トップの菓子メーカーへと成長し、国交正常化後には母国にも進出し、菓子をはじめに食品、流通、ホテル、レジャー、さらには石油化学など基幹産業にまで事業を拡大した。韓国財界5位の財閥を一代で築いたことは知られている。 日本社会への適応、国交正常化、母国の開発独裁への対応と、時代が急速に推移していく中、いかにして重光は企業家としての高い競争力を持ちえたのか。在日韓国人研究の中で企業家一世に言及した研究は極めて少ない。韓国でも重光に関する研究は皆無に等しい。本研究では、重光の理念と行動について、従来の在日韓国人企業家研究で言及されていない新しい視点を提示した。それは「イノベーターとしての創造的破壊」、「市場としての韓国」、「大統領・政府との関係と重光自らの力量」、そして「自らの限界克服」であった。 第一は、ガム競争に勝つための「革新」、「創造的破壊」というシュンペーター的側面である。後発のロッテによるトップ・ハリスの駆逐は、ガムの主成分に天然チクルを使う高品質化と斬新なマーケティングの実践によって実現された。第二に、重光自身が韓国を冷静に一つの市場ととらえていた。先を競い母国進出を急ぐ多くの企業家と正反対に、重光は国交正常化による経営的投資的環境整備を待った。第三に、日本事業の経験を韓国に移植する日韓時間差経営、さらに日本の菓子事業路線に対し韓国では非関連多角化路線を推進した。これは朴正熙大統領や韓国政府との強力な関係とともに重光の企業家としての旺盛な拡大思考によって実現された。そして第四に、韓国事業を展開する際のキーパーソンの存在である。韓国での創業の際、人脈ゼロの重光が三顧の礼で会長に招き入れたのが劉彰順である。有能な経済官僚であり中央銀行総裁を歴任した人物は、重光にとって韓国事業全般において欠くことのできない作戦参謀であり自らの右腕となった。 日本では重光武雄として総合菓子メーカー・ロッテを発展させ、韓国では辛格浩として菓子をはじめ幅広く非関連事業を展開し、財閥化を実現した。他の在日韓国人企業家の経営成果には見られない、明確に差別化される重光の企業家としての特異性が確認できる。 キーワード：在日韓国人企業家、重光武雄、辛格浩、ロッテ、韓国				